

なにかまの音

3 女と政治

男と女は

同じ世界を生きて

いない

六十年安保は高三で、大学時代もいろいろ世の中の動きにまきこまれてきました、その当時、政治に無

関心であつてはならない、といひ、困りもそんなフンキで、その点かなり努力しました。中国の文化革命もベトナム戦争も七十年安保もその後ありました。

全共闘の提起した問題も、自分なりに考えました。そのかぎりではまあ考える方だったかもしれせん。

それが、パタッと関心をなくした

のは、自分がいちばん問題としていて出口が見いだせなかった事がらが、リブの思想によつて解かれ、ゆく道を知つてからです。リブが非政治的であるわけはありませんから誤解しないで下さい。あくまで私的、個人的体験でのことです。

男と共に政治を考えても、その男の女差別は目の前にある。男は天下国家を論じて、わたしにとって壁となり、足かせになるのは「男の性差別」であるかぎり、男と同じレベルで政治を論じられるはずもなく、ヒマもない。実にあなたが云われるとおり、男と女とは同じ世界を生きてはいない、私もそう思います。

男は自分の解放のために政治機構

を変えたいと思つてゐるかもしれない。だが、女は自分を解放するには、男を変えなければならぬ、もしくは男と戦わなければならぬ。その上で、政治機構の変革が可能になると思つてゐる。

ほんとうに、今の政治は五五パーセントの人のものでしょう。国会をみわたせば男ばかりで、女はつたし程度。内閣には女はひとりもない。地方議会もおなじこと。五五パーセントを代表しているだけです。女が無関心であつて当然、とひらきなおりたいところです。でも、それ以前に言いたいのは、これはまさしく、男の暴力に他ならない、ということです。

新聞の論説委員に女はひとりもない。記者の大部分は男ばかり。女

の側に立つて書かれる記事などとうすじちがいである、としかいえない

ていのぞめません。新聞はだから読んでつまらないのです。雑誌の広告をみると、執筆者が男ばかりの本もめずらしくない。十名中一名でも

それが女にとってなんだというの

女がいればいい方。どこを見ても男

が支配している。この図は、女にと

ってどれほど抑圧的であることでしょう。これが日々女を打ちのめしてい

る暴力でなくてなんでしょう。こと女に関しては右も左もまったく

同じ、女を家に囲ったカクメイなんかクソクラエノとそんなふうな気にも

なります。

女は男の奴隷であり、性も生も男

の手に握られている状態がかくも長く続けば、奴隷根性が女の属性にま

でなるのも不思議はないし、それについて男から非難されても、それは

すじちがいである、としかいえない

だろう。だから誰が党首になろうと

いくつ黒いビーナツを食べようと、

それが女にとってなんだというのだ

なる。

政治に無関心であっても、ちゃんと税金はとられ、時の支配からはのがれられないことはわかっていても男の政治の不始末は男でかたづけて

くれノと、叫んでもみたくいのです。

このなにやらモヤモヤと女の胸にたちこめるもの、少しなりとも感じ

とっていただけるとうれしいのです

が。

※

※

無給で女だけに与えられる育児休

暇制度に何ひとついいわらない男たち、

「母ちゃんさえも働かざるをえない

ような低賃金」などと平気でいう男

たち、であるかぎり、男と女をと

につつまこむ闘争なんて不可能だと

思います。

(M・S)

女と政治

アーノルド・ベネットの「二人の女の物語」これは戦前、老妻物語というタイトルで文庫に入っていました。二十才台から十年に一度ぐらいくりかえし読むのですけれど、読むたびに面白くてたまらず、読み終るとうす笑いをしながら（このうす笑い、作者の表情がうつっているのだと思います）これを書いた奴は、死んだらきつと地獄行だと思ふのです。

女にとって、バリの包囲もコンミューンも、物価が上がるといふことと、やがて食料がなくなること、どっか遠くの町で運の悪い人たちが、大砲でやられる。共和制になったら職人がいやにいばって、家屋の修理

などちょっとやそつとはやってくれない。ちょっと不安になることもあるけれど、そんな時にはバリ二百万の人間がいっしょにいて、みんなが同じ状態なのだから心配するのはばからしいと思う。やがて講和のウワサが出て、いままだ閉店していた店がいっせいに高値をつけた。おびただしい各種食料品で花が咲いたようになる。そして食糧飢饉は人がこしらえたものとわかり、大いに怒るけれども、身近にある食料品店にくむだけだ。

こうやって、おぼえていくことをならべてみるだけで、何と、どこやらのだれかさん（私のこと）のことを言ってるみたいだと、てれてしまいうくらいなのです。そこでもっともらしく言訳をするのです。

女は戦争だって何だって、食料を買い、食物を作らねばならなかったのだから、男だって、やってみればわかるワ。安い食物を買いあさるのが唯一の仕事である町の女たちが政治にかかわる最も普遍的な場所が物価であると言えますが、果してここが、女が政治に関心を持つきっかけとなり得るかと言えば、私はそんなふうには思えないのです。物価のミノーベさんの人気と女達ののぼせようそしてその末路をみても、政治とはもっとちがうものなのだと思います。では政治とは？……私にとつて、これは宿題でまだ答ができません。

(S・M)



男は存在そのもので

圧力である

女がおんなの運動を進める中で、女だけがいくら覚醒しようと、それは他より遊離した所謂「尻まくった女たち」としか見なされない。男ともども社会・世界まるごとのあらゆる角度からの変革が必要だ。

しかし、男の口から勇み立って吐き出される「革命」というコトバには、少なからず生理的拒絶反応が起る。今まで男によって論ぜられた、おおかたの「革命」には、女の入る余地なく、女の側からの論理は語られない。其処にあるのは「男」的発想の所産である革命論であり、男らしさの表象としての革命方法論であったと思う。

そういった意味も含めて、おんなは男の強いて云えば、男権社会のおまけ的存在として見為されがちであった。搾取の原的な被害者としてのおんなたちが耐えること「わからない」と答えることを美的として生き続けてきた。表皮は変わっても、中はさ程変わらず、虐げられたり、はじき飛ばされたりする男が、虐げ的存在としての女が、あるいは「主婦」という肩書で、あるいは主婦として誤謬の中に生きている。

極端に云うと、男は存在そのものによって、既に女にとって圧力である。「男らしく」の教育を受け、着々と、ためらいなく「男らしさ」を身につけてゆく男の存在は、私にとってまさに脅威である。

男は生まれた時から男であり、そ

の性に誇りを持つべく育てられ、女は「女に生まれるのではなく女になるのだ」と云われてはばからない。このようなことを観念的に理解していても、日常生活において、自己の認識の外で男らしさを振りまわしている男の何と多いことか！

しかも、体現が困難だなど云うなんて、男の傲慢そのものではないか。女の性や生を圧殺しての、男の性や生が望めようはずはないのだから。

日常茶飯事的な、男または女との毎日のかわり合い方から変えてゆくこと。両性の伸びるべき方向を探り合い伸ばし合うことの方が、デモったりヤジったりすることよりも、難しい場合もあり、また重要だとも思う。自分の汚した皿一枚洗うのにも

面倒臭いが先立つ男と、云うよりや
った方が早いからと思う女とが居る
んだから、認識の練磨と交換が第一
歩だろう。

だから公害反対を叫ぶ口には、森
永や農薬たっぷりの野菜などを入れ
ないのと同じレベルで、差別反対・
反権力を叫ぶ人には、女とのあり方
男とのあり方から、まず考え直して
欲しい。

(猫野たま)

革命につっぱしるのは

女の方?

ロッキードにしても、選挙にして
も、男の床屋談議はさながらゲーム
を見るような熱の入れよう。女の方
は、大根を煮たり洗たくをしたり、
する毎日とは「かかわりのない」と
思うか、「革命しかない」とバツと

直観するか、どちらかでしよう。

そうすると、革命につっぱしるのは
女のようですね。たゞ女は革命へ
の道が複雑で巨大であることが理解
できず、ヒステリーを起したり、絶
望したりすることが早いのです。

(S・M)

私的なものをも

含みこむ変革を

男が公的な事柄に、そして非日常
的な事柄に興味を持ち、女性が私的
なそして日常的な事象に興味を持つ
のは、多分に生活形態の差違とその
積み重ねが産み出したものではない
でしょうか?

男と女という「分類ではなく、日
常的、私的なものを欠落させざるを
得ない政治」とは何なのか?という

のが向井さんの文章に触発されて出
て来た僕の考え方です。

女が、三木一椋名ということに興
味を示さないのは、彼女達の生活の
中に「公」的なものと接触する機会
がない以上仕方ないと思います。

僕のみる所、彼女達が自分を越え
たものを意識するのは、子供に関し
て位ですが、それも「公」ではなく
「私」のカテゴリにはいってしま
うでしょう。ハンサムな候補者に投
票するのは、それだけ知的レベルの
低い生活をおくらざるを得ない疎外
状況の反映だと思えますし、新しい
帽子を被っただけで世界が一変する
というのは、ディティールにおいて
は違いかも知れませんが、僕も長髪
から短髪になった時感じました。
私的なもの、日常的なものを含み

こむような変革、というのが民衆自身の変革運動に必要なものではないでしょうか？

(O・M)

現在の政治を

知ることなんて

私は女の△関心▽が社会革命から速くあるとは考えません。私は直接民主主義が生々と息づく社会をえがいていますが、そうした社会をつくっていくのに、現在の政治を知ることなんてそうたいして重要なこととは思っていません。新しい帽子をかぶって世界が一変する—このことは女にだけでなく男にだって、こんなにはっきりした形ではあらわれないにせよあるだろうと思います。男の服装（赤いシャツを着ているのと黒いシャツでは違うように）にもあ

らわれているのではないのでしょうか。

(E・S)

「大政奉還」の論

第一に、リブにおける基本的概念である（生物学的性別または女性の本質＝セックスと区別された）ジェンダーと、セックスのいずれを、この「女たち」は指しているのであるか？ということが問題になるでしょう。ジェンダーとしての女性の政治への無関心という「傾向」は、男性支配（その起源は今論じないとして）の帰結であり、その責任は男性に帰せられるべきであって、男性にこれを非難する資格は無いでしょう。

すること、「政治」をイッサイガッサイ女性に委ねること、それからなければ「女性性は政治に無関心である」という命題の真・偽を決することはできないでしょう。政治を男性が独占しておいて、女性性は政治に無関心だ、と言うのは、自分が着ている服をよごした人が、「この服はよごれていていけない」と言うのと同じです。

第二として、男どもが政治から手を引き、（今まで「男だけ」で）女だけで政治をするようになったとしたら、そうした女性に独占された政治は、これまでの（男性に独占されてきた）政治と同じものだという保証は全然ありません。もしかするとこれまでの政治の観点からは、「政治とはいえないもの」反・政治が行

なわれる、無政治社会になる―かも知れません。もしもそうだとすると政治に無関心という女性の特質は、男性によってガイタンされるべきものではなくて、(少なくとも、アナキストによって) 高く評価されるべきもので、ではないのでしょうか？

そして、「もしも、女性による反政治の行なわれる社会が、我々が理想とするものだ」とすれば、そのようなばならない、というものでないで、女性上位社会へと現・男性独裁社会を変革するためには、女性が「(男性によって独占されている) 政治」に関心をもち、自らも女性独裁政治実現のために努力しなければならぬ、のではないか」というのがそれです。

これは、全く男性的な世界における、非・アナキズム的な支配のため

の政治の例ですが、ガリバルディは赤シャツ隊をひきいてイタリアを統一した後、(自ら統一イタリアの支配者になることなく) 統一イタリアをサルディニアの王に献じています。女性が政治を独占するようにするために、何も、女性が自らその細腕だが太脚(失礼)を揮って、ヤローどもの手から政治を奪わなければ

今、書いてはご保管をお願いしている「愛の思想としてのアナキズム」を序とする本文では、男女平等でなくて、女性優位社会こそ理想だという結論になってしまふのです。これは、一人の女性に導かれて、(ジエンダーでなく) セックスとして女性の真価に眼を開かれたためです。(以下はFさんたちにはナイシヨです) その反面、ジエンダーとしての女性にはウンザリしており、それから男性が開放されるためには、大政奉還して男性独裁をやめ(それによって始めて可能な) ジエンダーとしての女性を改変しなければならないからです。負けるが勝なのです。

(江川晃通)